

## Exclusive Interview

同窓生シリーズ  
第79回

## 39回生 武内俊介

SHUNSUKE TAKEUCHI

日本大学農獣医学部卒 同大学院修士課程農学専攻修了  
京成バラ園芸株式会社に入社 現在研究開発部でバラの育種を担当  
育種したバラ「快拳」が2010年第58回ローマ国際コンクールで金賞受賞  
日本人としては28年ぶり2人目の受賞

— 子どもの頃から植物がお好きだったと聞いていますが、当時はまだまだ家の周囲に自然が多くあり、身近な植物と触れ合いながら育ちました。スズメノカタビラなんて、芝生の中に生えている時は背が高くなりません、鉢に入れると大きく育つんですよ。それが面白くて、近所に東京農業大学の先生がお住まいだったこともあり、随分その影響は受けたと思います。

— 興味の対象は専ら植物だったのですか？

植物に限らず、昆虫も好きでしたね。アリの巣を見つけると、地面の下の巣の中にどれだけアリが暮らしているのか知りたくなって、一匹一匹数えてみようとしたことを覚えています。とにかく一日中外で遊んでいる子どもでした。

— 中学生の時に凝っていたことがあるそうですね。

その頃、園芸界ではセントポーリアが流行しており、挿し木や交配してできた種を蒔いて増やして、2000鉢を育てていました。

— すごい数ですね！ お一人で世話をされたのですか？

さすがに自分一人では無理だったので、親父を巻き込んで水遣りも植え替えも一緒にやっていましたね。(笑)

— そして新宿高校へ入学、どんな高校生活でしたか？

サッカー部に入学、毎日朝練から始まるサッカー三昧の毎日でした。道具を大事にする方なので、シューズ磨きは一日必ず2回。だから教室の自分の机の周りだけが汚くて。数学の時間に「武内くん、お弁当がニオッてますよ」と先生に言われたこともありましたが、勉強は全くしていませんでした。(笑)

— その頃、植物との関わりは？

学校では植物好きなことは表に出していませんでした。園芸Ⅱ盆栽Ⅱお年寄り、みたいなイメージもあるでしょう？ でも植物の育種をしたいという将来の進路のイメージはありました。

— そして農学系へ進学、バラがライフワークになったのですか？

教授の勧めで、研究対象にバラを

選ぶことになりました。大学院では、DNAからバラの系統譜を起す研究をしていましたが、その材料となるバラをいただいたのが京成バラ園芸だったのです。

— それが新宿高校の大先輩、鈴木省三さん(府立六中5回生)との出会いですね。

はい、当時の京成バラ園芸にはミスター・ローズこと、バラのトップブリーダーの故・鈴木省三さんがいらっしやいました。院に残って研究を続ける道もありましたが、高校の大先輩でもある鈴木さんがいらっしやる京成バラ園芸に就職し、夢であった育種に取り組むことにしました。

— 鈴木省三さんはどんな方でしたか？

とても偉大な方、そしてまた厳しい方でもありましたね。とにかくたくさん本を読むように、と言われましたよ。また、アメリカ生まれのバラには英語で、ドイツ生まれのバラにはドイツ語で話しかけておられました。バラの棘でできた傷で額から血が出ていても「バラがじゃれてきた。」なんておっしゃって。

— さすがミスター・ローズですね！ 一緒にお仕事できたのは5年間だけだそうですね。

本当に素晴らしい方でしたが、2000年に亡くなられました。同年、鈴木さんの次のブリーダーでいらした





平林浩さんも亡くなり、いきなり2人の師匠を失いました。一人前になるのに10年と言われる育種の世界で、5年で独り立ちしなくてはならぬようになりました。今でも、お二方にお聞きしてみたいことが山ほどあります。

—バラの育種というのは具体的に？

年に一度、春にハウスの中で母株に父株を受粉させ

ます。交配親には名前の代わりにコード番号が付いているだけ。交配後はその番号を記したタグを付け、実が熟したら、種を取り出して蒔いていきます。4万花の交配で得られた30万粒の種から、約10万が発芽、最初の花が咲いたら、香りや色、花びらの枚数、耐病性など、欲しいイメージに合わせて選別していきます。そこで2000種ほどになります。年毎に選別を繰り返して、最終的に品種として世に出るまでには最低でも7〜8年。30万のうち2〜3品種くらいです。

—気が遠くなるような確率ですね。

そうですね。でも最初の花が咲くときはワクワクしますし、本当に感動します。どの花も「自分の方を見て！」と言うように一生懸命咲いているんですよ。

—武内さんなりに工夫されたことは？

交配のハウスの中では極力農薬を使わず、樹勢を落とすような強い剪定を控えるようにしました。ハウスの限られた空間の中でも食物連鎖が生まれ、バラもたくましく育っているようです。どの虫にもどの草にも、それぞれ固有の名前があり、役割を持っています。人間の都合からの「害虫」「雑草」という呼び名が、なくなるといいなと思います。

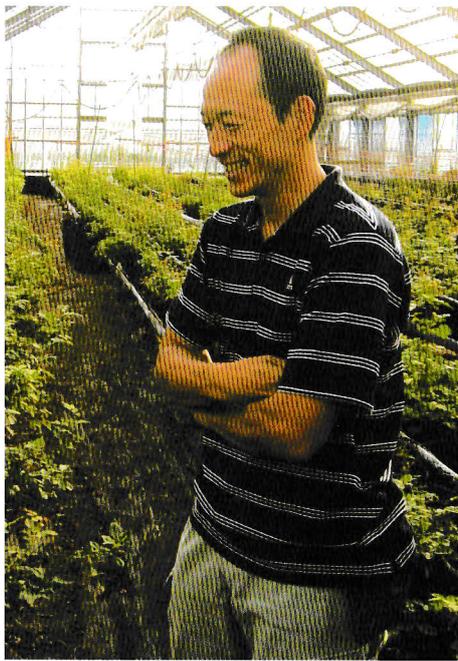
—その中で誕生したのが「快拳」ですね。あらためて金賞受賞、おめでとうございます。

ありがとうございます。海外のバラのコンクールでは、1年以上前にバラの苗を送ります。今まで育ってきた土とは全くpHの値が異なる土での栽培は、バラにとってはまさに生きるか死ぬか。その過酷な状況を乗り越え、1

かけて咲いた花が評価の対象になります。受賞の知らせを聞いた時は、本当に驚きました。「よくやった！」という感じでした。

—コンクール出品時は「快拳」はまだ品種名がなかったのですか。

受賞して初めて、公募で名前をいただきました。もし受賞していなかったら、ハウスの中でコード番号のまま交配親になっていたかもしれません。いいバラなのに、無名のまま世に出ないものがたくさんあります。「育種家にとって良いバラ」と「世間的に売れるバラ」は一致しないこともあり難しいものです。1本でも2本でも、バラに名前をつけてあげたい。そういう意味でも、コンクールはバラを世に出していく一つの大きな機会ですね。



—最先端のバイオ技術で、青いバラも話題になりましたが、どうお感じになりますか？

そうですね、遺伝子組み換えも育種も、植物の中で起こっている変化という意味ではほとんど変わりはありません。19世紀のヨーロッパなどで盛んに行われたバラの育種も、当時としては最先端の技術だったと思いますよ。そもそも、バラにとっては、大切な雄しべと雌しべを守るのに花弁は5枚で十分。それを100枚の花弁を持たせようとするのは、植物にとって本当は迷惑な話なのです。

—これからどんなバラを作っていきたいですか？

こういう花が咲くだろうと思って交配を続けても、な

かなか思い通りにはならないですね。でも、バラ自体が感動を与えてくれるもの。そしてその育種は感性の世界です。自分が素晴らしいと思ったバラが、1本でも多く名前をつけてもらえたらいいです。想像を超えたバラを作ってみたいですね。

—最後に新宿高生に一言。

今、いわゆる3Kと呼ばれる仕事に就いていますが、とても楽しんでます。地球温暖化や少子高齢化など、これからはいろいろな意味で大変な時代になります。どんな時でも「楽しむ」ということを大切にしたいと思っています。楽しみというのは、外から与えられるものではなく、自分の内から見出すもの。何事も、楽しむ姿勢を忘れずに取り組んでください。

—本日はどうもありがとうございました。

育種中のバラを、愛おしそうに見つめながらお話しする武内さん。花と虫と生命への深い気持ちのこもった、本当に印象的なインタビューでした。武内さんの作出された「快拳」は新宿高校の花壇にも植えられています。まだ小さい苗ではありますが、来年の春には香りの良い、美しい花を咲かせてくれることでしょう。

「快拳」

花色はレモン色で、クラシカルな咲き方。花びらは100枚以上と多いが、雨の多い環境でもしっかりと開く。ティーの中に柑橘系を含んだ爽やかな香り。



写真提供：武内俊介氏